全員野球

クロフォード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
全員野球

【Ｎコード】
Ｎ０６４１Ｈ

【作者名】
クロフォード

【あらすじ】
この話は、一人の好青年が野球を通して成長していく、そんな話である。その好青年は、晴れて強豪高、瑛香学園に入学するが、波乱万丈、友情、青春、試練……様々な壁にぶち当たりながら高校生活を送る。さて、この後どんな展開を迎えることになるか…。野球のルールなど、細かい解説が稀にアリ。野球初心者に時々優しい小説です（笑）野球をもとにした、文学教育小説です。教育……？いや、スポ魂ですね（汗

第一球　瑛香学園（前書き）

「全員野球」

題名と似つかない作品ですが、どうぞよろしく御願いします^^

第一球　瑛香学園

春――……。

ついこの前まで冬だったため、多少寒さを残しながら、春はやってきた。

どことなく、暖かさも感じる。

そんな中、高校入学を控えた一人の野球少年が河川敷で走っていた。

「はっ　はっ　はっ……」

彼の名前は、夜嶋（やしま）　勇（いさみ）。

これは、この物語の主人公である勇が、野球や学校生活の苦難や試練を乗り越え、人間的に大きく成長していく。

そんな物語である。

3月下旬…。

夕方、河川敷で黙々とトレーニングを続ける、一人の少年がいた。

夜嶋　勇…それが彼の名前である。

ランニング、体操、基礎トレ、ピッチング（壁あて）、素振り１００回×５０セット、ランニング、ストレッチ、クールダウンの順に毎日、雨の日も雪の日も嵐の日も日が暮れるまで続ける。

日が暮れると同時に、勇はトレーニングを止めた。

そして、ストレッチを始める。ストレッチを5分間、ゆっくりしっかりする。

そしてクールダウンを始める。

これを3年間、毎日続けているのだ。

「ふぅ……だいぶ体が戻ってきたな…」

3年間毎日と言っても、高校の面接の練習で、3年間のうち一日だけ休んだ。

そのたった一日の狂(くる)いで、勇の体は大いに鈍(なま)り、元の体を取り戻すのにかなりの時間を要するのだった。

まるで一流アスリートの繊細かつたくましい体を持つ１５歳。

右投右打、身長１７８ｃｍ　体重６９ｋｇ　５０Ｍ走(ラン)５．９秒　遠投８７Ｍ。

ＭＡＸ１３１キロ　得意球は高速スライダーと打者の手元で鋭く落ちるフォーク。

中学では市内のシニアチームで3番エースとして活躍した。
全国大会東京代表のエース候補にも挙がった。
勇は中学での功績をもって、推薦で高校に入学した。
「よっと……」
ストレッチを終えると、勇はスッと立ち上がり荷物を左肩に掛けて丘を上がり、丘の上に置いてある自転車に乗って帰宅した。

4月――。
私立瑛香学園入学式。
校門まで長く続く一本の道。
その両サイドには、桜並木がズラーっと続く。
瑛香学園の生徒は、その桜並木を通り、感傷に浸りながら通学する。

勇はそんな中を一人で歩いていた。

校門をくぐろうとすると、門の前に立っていた男性教師が生徒一人一人に声をかける。

「おはよう！入学おめでとう！」

気の良さそうな先生だった。

「おはよう！」

勇に向かってそう言った男性教師は、ニッコリとしていた。

「あ、おはようございます」

勇はしっかりしている性格だった。

「俺のクラスは……D組…」

学校掲示板に各学年のクラス分布表が貼られてあった。

勇は階段を上り、４階の一番奥の教室に向かった。

隣や前を歩く生徒を見ると。

「みんな良い体格をしているな」

と勇は思った。

さすがスポーツに力を入れている高校だ。

教室に入ると、勇は自分の席を確認した。

「夜嶋　勇…３５番…最後から2番目か……」

勇は静かに席に座ると、ふと窓の外に目をやった。

ラグビー部が練習していた。

瑛香学園は今年で創立５０周年でありながら、すべての運動部が優勝ありと言うスポーツ強豪高なのである。

特に野球部は、５０年のうち、甲子園出場回数が１７回そのうち優勝が６回と言う、全国から猛者が集まる超強豪高だった。

「そうか…野球部は専用グラウンドがあるんだったな…」

校舎から４００Ｍほど離れている所に、左・右翼９０Ｍ、中翼１２５Ｍの大きなグラウンドがある。

ナイターあり、室内練習場あり、トレーニングルームあり。

勇は、ラグビー部を見たあと、ぐるっと教室を見渡してみた。

「知り合いは…いないか」

周りを見渡しても、ガリ勉か体格の良いヤツしかいない。

仕方ないので、担任が来るまで勇は外を見ながら待つことにした。

しばらく時間がたった後、勇の後ろにいた男生徒が肩をぽんと叩いた。

勇はハッと振り向いた。

そこには知らないヤツがいた。

「え？　何？」

「よっす！　俺、吉村！　吉村　大成って名前！　お前の後ろの席だから、これからよろしく！」

「あ、ああ。よろしく」

勇は手を出した。

が、吉村はジッと勇を見る。

「お前の名前は？」

「え？　や…夜嶋だ。夜嶋　勇」

「やしま？　へェ！　面白い名前だな！」

今度は吉村が手を出した。

二人はガッシリと手を握った。

勇の吉村に対する第一印象は。

「変なヤツだな…」

しかし、勇はすぐにあることに気付いた。

「コイツ…すげえ握力だ…」身長も体格もさほど変わらないのに、こんなにも力が違うものと思った。

「どうやって書くの？」

「え？」

勇は少し驚いた。

「やしま　いさみってどうやって書くの？」

「え、ああ」

勇は紙とペンを取り出した。

「こうやって書くんだよ」

「ふ～ん…『勇』って書いて『いさみ』って読むのか～…・・・カッケーな！　ハハッ」

「は…は、そうか？」

（力もあって、陽気で面白そうなヤツだけど、変なヤツには変わらねーか…）

勇はそう思った。

すると、担任が入ってきた。

「はい、おはよう！　　みんな入学おめでとう！」

ズカズカと教卓まで堂々と歩いていく。

「私が今日からこのクラスの担任を務める、岩井（いわい）　修平（しゅうへい）だ！よろしく！」

元気で明るい気の良さそうな先生だった。

「ん？」

勇は少し考えてみた。

（あ…今朝校門の前に立っていた先生か……）

それから岩井担任の話が延々と続く。

始業式などいろいろあったが、放課後。

勇は、早速野球部グラウンドに顔を出した。

一人で来るはずだったが、変なのに捕まった。

「でさ、俺さ、中学でさ……」

グラウンドまで来る距離の４００Ｍの間、自慢話を聞かされる。

吉村だ。

聞けば、吉村は去年の軟式野球全国大会の優勝チームの４番らしい。

確かに、真芯に当たれば軽くスタンドインする力は持ってそうだった。

グラウンドに着くと、そこには一人の男とその前に整列する生徒達がいた。

みんな新入部員だった。

「多いな……５０人ぐらいいんじゃねーか？」

「おい、早く行くぞ！」

勇と吉村は、急いでバッグを置いて整列している新入部員の中に入った。

第二球　入部試験～前章～

「瑛香学園野球部、入部希望者全員整列！」

バックネットの前に二人の男が立ち、そのうちメガネをかけた一人の男が前のように言った。

そして、もう一人の男が口を開いた。

「入部希望者の諸君、ようこそ瑛香野球部へ！　私が瑛香の監督を勤めさせてもらっている、鬼城（きじょう）　竜馬（たつま）だ。よろしく」

そう言って、監督の鬼城が組んでいた腕を下ろした。

『よろしくお願いします！！』

監督の挨拶が終わると、つい最近まで野球少年だった子ども達の爽やかな挨拶が一礼とともに、一斉に返ってきた。

すると、メガネの男も挨拶を始めた。

「そして、私が瑛香野球部の顧問を務めさせてもらっている、菱沼（ひしぬま）和人（かずと）だ。担当は1年物理だ。よろしく」

『よろしくお願いします！！』

勇は、心の中でこんなことを思っていた。（あれが鬼城監督……甲子園で何回も見たことがあったけど…実際に生で見ると、迫力あるなぁ……）

鬼城は、軽いドレッドの黒の髪の毛に、黒いコートに身を包んだ、不思議なオーラを纏(まと)った男だった。

「じゃ、軽く自己紹介してもらうから、な。じゃあ……そこの一番端のお前からそっちの端までな。蛇行するように一人ずつ、出身中学校名と名前、あと自分のポジションを言ってくれ」

メガネの男は、左端の生徒を見ながら言った。

左端にいた生徒は、後ろに手を組んでハキハキと自己紹介を始めた。

「はい！武蔵一中(むさしいっちゅう)から来ました！平田(ひらた)　英良(ひでよし)です！　ポジションはライトです！」

自己紹介を始めると、菱沼がメモを始めた。

勇が自分の言うことを頭の中で整理していると、吉村が小声で話しかけてきた。

「な！　おい、いっちゃん！」

勇は少し驚いた。

「なんだよ、話しかけるなよ！　つーか、『いっちゃん』て何！？」

吉村は笑いながら言う。

「『勇』だから『いっちゃん』！　いいだろ別に！　それよりさ、これってさ、中学でやってたポジション言うのかな？」

「え？　…そりゃ、まぁ……そうじゃね？」

「俺、やりたいポジション言おう！」

勇は更に驚いた。

「はぁ？　お前、ポジションどこだったのよ？」

「俺？　エース」

吉村は勇をもっと驚かせた。

「お前が！？　ウソ！！　全国優勝チームの四番でエース！？」

「あ、なんかムカついた。悪かったな！」

吉村はそっぽを向いた。

「ああ、ごめんごめん！　悪かったよ！　俺が悪かった！　許せ！……でもすげーなぁ！四番でエースか……俺も四番でエースが野球の醍醐味だと思ってたんだけどなぁ……」

「あれ？　そういえば、いっちゃんって何番だったの？」

「俺？　俺は三番だったよ」

「えー！　いいじゃん三番！　いいなぁ！　羨ましい！」

その言葉は、勇には嫌味にしか聞こえなかった。

「お前それ本気で言ってんのか？　嫌味にしか聞こえないんだけれども……」

「え、うん。いいじゃん！　三番バッター！」

「そうか……？」

「でさ、シニアの四番ってすげーんだろ？　どんなヤツだった？　有名だった？」

吉村がそう問いかけると、勇は少し暗い顔を見せた。

「ああ……ヤツはすごかったさ。確かに有名だったし、慎重も大きくて守備も肩も良いし、足も速かったし、何より『公式戦通算　８割強　１９本　８８打点』のありえねーバッティングセンスは本物だ……本当にすごいヤツだった。だが……最悪の女房だった」

「え？　女房って……？　いっちゃんとそいつってバッテリーだったの！？　すげーじゃん！　すげーじゃん！」

「……」

笑っていた吉村は、さっきの勇の言葉に疑問を抱いた。

「あれ？　でも最悪って？　なんで？　なにかあった――……」

「次！！」

吉村の言葉を遮るように、鬼城の言葉がのしかかる。

「吉村…お前の番だぞ」

「あ、俺か……ゴホン！　えー、聖林(せいりん)中学から来ました！　吉村大成です！　希望ポジションはファーストです！！　ん～と、話すと長くなるんですけど、俺、中学のころは四番でエースで、全国大会でゆう――……」

「次！！」

吉村の自信満々の演説を玉砕するが如く、鬼城は『次』のたった一文字で片付けた。

周りから失笑が聞こえる。

「お前……無駄なことまで言いすぎだよ…」

勇が慰める。

「だってぇ……俺のすごさを知ってもらいたくてぇ……」

吉村はがっくりと俯いた。

「……北瓦(きたがわら)中から来た、夜嶋　勇です！　ポジションは投手です」

勇の自己紹介はコンパクトに内容をまとめた自己紹介だった。

「えー……なんかショボイ…」

項垂れる吉村は顔だけ勇に向けて言った。

「うるせぇ　これぐらいコンパクトが良いんだよ！」

進入部員自己紹介は勇で最後だった。

「はい、以上４６名か……」

進入部員はこのあとに何が起こるのか、ドキドキと胸を高鳴らせながら鬼城を見る。

しかし、この後鬼城が発する言葉は、進入部員の度肝を抜いた。

「んじゃ、これから君たちには『入部試験』をやってもらう」

【ザワッ】と、進入部員のどよめきが起こる。

「やっぱり入部テストがあったか……」

勇がそうい言って吉村を見ると。

「ハハッ！入部テスト！わくわくするなっ！」

勇は一人、こう思った。

（入部テストと聞いてわくわくするのはお前だけだ…吉村）

鬼城が説明を開始した。

「じゃあ、これから諸君には試験（テスト）をやってもらう。まずは守備のテストを受けてもらう。次は打撃。走塁。投球。『走・攻・守・投』この四つを点数化して基準を超えた者を合格とし、正式に入部させる。すなわち！全員合格もあれば、全員失格もあるということだ。もうひとつ。合格した者どもで、勝負をしてもらう。一人が投手をし一人が打者をする。まぁ、くわしい説明はその時、二人以上の合格が出たら、な。あぁ、あと推薦などで体育科のコースにいるヤツは安心しろ。不合格の場合普通科に移れるように顧問の菱沼さんがしてくれるからな」

「そ……そんな！！」

新入部員のほとんどがそう口にした。

今まで野球しかやってこなかった者がほとんどだからだ。

そんな中、勇は疑問に思うことがあった。

（なんで合格者同士で勝負なんて……？まさか合格者同士で落とし合うのか？）

「まずは守備からはじめよう。俺がこれからノックする球をなるべく多くとれ。多く取れば取るほど点は高い。それと、あのファーストに立ててある直径２０ｃｍの円形の的に多く当てればもっと点数は高くなるぞ。それに、あの的の中心の赤い部分に当てる事により、点数は変わってくる。まぁ、がんばるこったぁ」

菱沼がボールを持ってきて、鬼城がバットを持ち、素振りを始めた。

すると、一人の新入部員が鬼城の元に駆け寄った。

「あの…すみません……グラブ忘れてしまったんですが……」

すると、鬼城は背中を向け一言。

「失せろ」

そういった。

「へ……？」

「お前のようなやる気のないヤツは瑛香にはいらん。さっさと失せろ」

鬼城は、新入部員を容赦なく払い除ける。

「でっ、でも僕は西広シニアのレギュラーで全国まで行って……」

「知らん！　出て行け！」

鬼城は新入部員に向かって声を荒げた。

その新入部員は、半泣きでグラウンドから出て行った。

「おい……あいつって神奈川の西広シニアのエースの小林じゃねーか？」

一人がそういうと、皆が騒ぎ始める。

そこに、鬼城がバットを地面にたたきつけた。

「気に入らぬようなら帰ってもらおう。こちらから頼んでまで居てもらう必要性は、お前らには無い。ただ私たちは、〝野球の能力（センス）が並みの選手に比べて上に居るもの〟を集めただけだからな」

「……」

反論をするものは居なかった。

「じゃあ、試験開始だ。まず、そこのお前からだ」

【カキィン！】

と、新入部員の応答も聞かずに鬼城はノックを始めた。

「ひぇ！」

【バシィ！】

鬼城が打った球は、とてつもなく速かった。

かろうじて捕球することができたが、鬼城は休む間を与えない。

間髪容（い）れず、選手がボールを投げると、その直後に打つ。

【キィン！　カキィン！　カァァン！】

エラーを続ける目の前の新入部員。

ちょうど２０本ぐらいあたりで、鬼城は。

「次！」

と、端にいたヤツから指名をしていく。

鬼城は疲れを知らないのか…その打球は衰えることはなく、鬼城自身も疲れたそぶりは無い。

もうすでに４０人のノックをしている。

しかし、そんな中一人、異常なまでにグラブさばきが上手いやつがいた。

【カキィン！　パシ！　カァァン！　パァン！】

と、２０球全て捕球した。

『おぉおぉぉぉぉ！』

と、歓声が沸く。

最後の一球…あきらかに鬼城は今までとは違う、猛烈な打球を打ってきた。

しかし、そいつは、表情一つ変えることなく……その打球を捕球した。

その姿は…まるで蝶の様に優雅で美しい身のこなしだった。

そして、そいつが投げたボールは、どの体勢から投げられたものでも、全てファーストの的の中心部に塗られた赤い部分に当たっていた。

鋭い球が、一直線に的を突く。

これこそ、『蝶が舞い　蜂が刺す』というものだった。

声は出なかった…いや…美しいからと言うわけではなく、実力の違いを勇たちは思い知らされたのだ。

高校野球のレベルを知らされた。

そいつの名前は、秋名　陵。

出身中学校はまったくの無名校で、不思議な男だった。

「アイツ……凄くね？」

さすがの吉村も驚きを隠せないようだった。

勇たちも、そこそこ捕球・送球は出来たが、秋名とは雲泥の差だった。

「……」

勇は秋名を見つめ黙り込んでいた。

そこに、鬼城が特有の大声で新入生たちに指令を出す。

「次はバッティングだ！！　全員三塁側ベンチに集合！！」

言われるがままに、勇たちは三塁側ベンチに集まった。

勇たちが並び終わり、周りを見わたしていると、ライトから練習着を着た二人組みが歩いて来た。

一人は、体格の良いキャッチャーで、もう一人はキャッチャーよりは小さいが高校生としては標準の体格をした男だった。

二人が歩み寄ってくるのを見て、新入部員たちはザワザワとざわつく。

二人がマウンドとキャッチャーの位置につくと、鬼城は話し出す。

「あいつらは、瑛香のエース・中田（なかた）　健介（けんすけ）と、正捕手・海原（みはら）　浩次（こうじ）だ」

え！？っと、どよめきが起こる。

「瑛香のエース！？」

瑛香エースの登場に、新入部員の誰もが驚いた。

しかしそれ以上に驚くことが勇たちにはあった。

実は歴代の瑛香のエースというのは、とにかくでかくゴツイ感じだったのだが、中田は違った。

標準体格で、顔はキレイで、皆が抱く瑛香エースのイメージが総崩れ。

下手すりゃ、投手と捕手が逆になってるんじゃないか、と思うぐらいだった。

それに新入部員たちは驚いていたのだった。

中田と海原は、じっと新入部員たちの方を見ていた。

「こいつらバッテリーが今からお前らの相手をする。三球勝負だ。

これも“一球でも多くバットに当たったら”点数は高くなるぞ」

その言葉に、新入生はクエスチョンを浮かべる。

「バットに当たったらだって！？」

完全にナメ切っている……。

新入生全員そう思っていた。

「まァ、頑張るこった。言っておくが、あいつらには本気でやるように言っておいた」

この時、打撃に自信がある部員の誰もが『目に物を見せてやる』と思っただろう。

だがこの後……新入部員たちは思い知る事になる。

瑛香バッテリーの脅威を……！

第三球　入部試験～前章～

最初に打席に立ったのは、吉村だった。

なぜか、いや、やはり吉村は自信満々に、バット片手に打席へ向かった。

打席の前で爽やかに、大きな声で挨拶をし、右バッターボックスに立った。

「うん……雰囲気出てるな」

誰しもそう思っただろう。

さすが、全国大会優勝校の４番だ。

しかし、新入部員が何度見ても思うのは、エースの中田のピッチングの事だった。

左投げ……。

これだけで、速球派というイメージは０に近い。

「ＭＡＸ１３０キロぐらいだろう」

「変化球投手だろ」

そんな言葉が行き交う。

歴代の瑛香エースは、常に１４０キロ後半を叩きだし、観客を奮い立たせる三振ショーを自慢にしていた。

新入部員たちは余裕の顔を見せる。

しかし、吉村は違った。

打席に入る前までは、陽気に振舞ってたが、打席に入るとまるで別人。

完全に集中している。

その緊張感が、ピリピリと伝わってくる。

勇がそんな事を思っていると、バックネット裏に鬼城、部長の菱沼が主審の防具一式を着用してキャッチャーの海原の後ろに構えた。

「じゃあ、始めます……プレイ！」

急に辺りがシンと静まり返る。

今度は、勇を含める新入部員たちにも緊張感が走る。

その刹那。

中田が大きく振りかぶった。

その強靭な足腰がピンと張った。

そして、その鍛え上げられたであろう足をグッと胸まで持ってきて、

鋭い眼で吉村を睨む。

その瞬間、それに対抗するように、吉村はキュッと打つ構えに始動した。

中田が右足を大きく前に踏み出す。

グイッと胸のボタンがはちきれんばかりに胸を張る。

鞭のように中田の腕がしなり、その指の先からボールが弾き放たれた。

瞬間、まるで時が止まったかのようだった。

吉村のバットが動く。

【パァァン！】

中田が放ったボールは、想像を絶する威力だった。

あの細い指から放たれたボールは、そこいらの速球派高校生投手の比じゃなかったのだ。

吉村の鋭いスイング音と同時に、海原のミットの心地良い音が響く。

菱沼の右手が上がる。

『うおっ！！』と新入部員が声を上げる。

「はえぇ……！！」

実際、中田の速球はＭＡＸ１５４キロ。

しかも、後に、中田は変化球投手だと告げられるのだが、１５４キロで変化球投手と言われれば、もうお手上げ状態である。

周りが騒ぐ中、勇がふとバックネット裏の鬼城を見ると、鬼城はなにやらメモをしている。

「……監督は、バッティングフォームやスイングスピードを見てるのか……？」

何にせよ、打つべし。

吉村は、中田の第２球に備え、一度バッターボックスをはずし、２，３回素振りをする。

「それにしても、良いスイングだな……」

勇が思うのは、新入部員も同じだった。

吉村は、またバッターボックスに戻り、さっきと同じように構えた。

中田も、さっきと同じように振りかぶり、右足を踏み込み、思い切り腕を振る。

速球！

誰もがそう思った。

吉村も心の中で『もらった！』と思ったであろう。

しかし、そのボールは吉村の手前で急に曲がり、インコースをえぐる。

【ゴキィ！！】と音を出し、ボールは中田の前に転がる。

「なんだ！？　打ち損じか！？」

それは、周りから見れば“ストレートを打ち損じた”としか見えなかった。

それぐらい、速い変化球（高速スライダー）だった。

その時、吉村から『あっ！！』と声が出る。

皆が転がるボールから吉村のほうに注目すると、今度は皆が『あっ！！』と声を出した。

なんと、吉村の金属バットがへし折られていた。

１５０キロの高速スライダー。

どうやら、鬼城が言ったように、相手は本当に本気でかかってきているようだった。

新入部員が一気にざわついた。

しかし、その中吉村だけは嫌にニッコニッコしていた。

すると、吉村は新しいバットを手に持ち肩に乗せ、もう片方の手で中田を指差し、急に大声を出す。

「中田先輩のクセ見つけちゃった～！」

「！？」

その発言は、そこにいた全ての人を驚かせた。

「クセ……だと？」

ここで初めて中田と海原が口をあける。

鬼城も、顎に手を当て意味深げに薄く笑う。

おそらく、今この中で中田の“クセ”を見破ったのは吉村だけだろう。

しかもたった2球で。

「いや……アイツ、本当にクセなんてわかったのか？」

しかし、新入部員の信頼は薄い。

「まぁ、見とけって」

そうは言ってないが、吉村の背中はそう語っていた。

吉村がバットを構えると、中田がサインを確認し、また大きく振りかぶる。

全員が中田の動作一つ一つに目を凝らす。

中田が腕を振る。

その手からボールが解き放たれる。

横からじゃ、変化球か直球か皆目見当がつかない。

だが、吉村は中田の心の中が判るかのように、完全な狙い撃ちでそのボールを捕らえた。

【キィィィン！】

と、金属バットの快音を残して、吉村の打球はライト方向に上がる。

『オォォォォォッ！！』

っと、新入生からどよめきにも似た歓声が起こる。

打球は、ライトのポールを襲う！

「ファールだ」

吉村はそう呟いた。

そう言った通り、打球はポールの右を通って、雑木林に消えた。

「ファール！」

菱沼の声が響くと同時に「あぁ～」とため息にも似た新入生の声が漏れる。

鬼城のペンを持った手がサラサラと動くのが勇に見えた。

吉村は、打席の足場を直しながら思った。

「今のストレートは１５０キロぐらいで……高速スライダーも１５０キロぐらい。他に変化球があるとしたら、フォーク、シュート、カーブとか……たぶん必死で喰らいつけば、カットぐらいは出来んだろ！」

その考えの通り、中田はそれから多彩な変化球を投げ込む。

しかし、その全てを吉村は必死に喰らいつき、カットした。

合計１３球。

その全てをカットする吉村も天晴れだが、全てストライクに投げ込

む中田も天晴れである。

そして、最後の外角ギリギリの高速スライダー。

先ほどと同様に、打球はライトポール際を襲い、ファールになった。

打球が雑木林に入るのを見て、『ファール』と主審の菱沼の声を聞くと、中田は吉村に鋭い目を向けた。

それに気付いた吉村も中田を見据える。

すると、ほぼ同時に二人は睨み合ったまま、フッと笑みを浮かべる。

そして、中田は吉村に向かって、ストレートの握りでガッシリとボールを掴んだ左腕を向けた。

直球勝負。もとい、予告三振だ。

すると、吉村は負けじとバットをバックスクリーンに向かって突き立てる。

予告ホームランだ。

その雄姿を見た新入生は、「うおぉぉぉぉ！」と身震いを起こした。

その後は、中田の渾身のストレートが連投され、吉村はそれをバットに当てる。

すでに中田は先ほどから合計２０球以上ストライクを投げていた。

二人は目が合うたびに笑む。

勇はその二人の姿を見て、心に棘が刺さったような胸の苦しさに見舞われた。

勇は過去に、このような勝負をしていた最高の好敵手（ライバル）がいた。

その好敵手は、将来日本球界を背負って立つ男になるはずだった。

しかし、その好敵手は勇の“過ち”によって、野球人生を……いや、全ての球技を諦める事になってしまったのだが……。

中田は、額の汗を袖でグイッと拭うと、また鋭い眼で吉村を睨む。

吉村はすでにバットを構え、中田を睨み続ける。

そこに、もう笑みはなかった。

大きく振りかぶり、腕をしならせ、中田渾身のストレートが吉村の内角に迫る。

今までよりも速かった。

それに反応した吉村のバットが動いた。

【カキィィィィィン！！】

――――春の青空に快音を残し、白球は美しい弧を描き空を舞った――。

第四球　入部試験～中章～

打球は、空高く上がり、しかし力強くグングン伸びる。

グラウンドにいたものは皆、口を開けて打球の行く末を見る。

そこに、歓声も何もなかった。

ボールは、ドスン！という音を響かせ、外野の芝に落ちた。

その瞬間、新入生から『うおおぉぉぉぉ！！』と歓声が上がる。

吉村は、ただ真顔で中田を見る。

中田も、吉村の打球を見送った後、まるで引き寄せられるように吉村と目が会う。

すると、吉村は脱帽し、「あざーしたっ！」と挨拶して新入生の元に返っていった。

中田も帽子を脱ぎ、フッと微笑んだ。

二人の間に、熱い何かを感じた勇だった。

鬼城は黙って何かを書いていたが、勇には鬼城の口元が薄く歪んでいたのがわかった。

続く打者は、ことごとく中田の前に朽ちていく。

勇も打席に立ったが、一球バットにかすっただけで、全然歯が立たなかった。

「吉村(アイツ)はこの球を打ったのかよ……！　しかも硬式野球になって、まだ日が浅いはずなのに……！」

勇は、吉村の打撃技術の高さと共に、自分の未熟さを痛感させられた。

勇は心の中で、吉村に敵対意識を向けた。

しかし、それは表に出さないのが、勇の性格だった。

「いっちゃんドンマイ！　最後の一球、惜しかったじゃん！」

励ましてくる吉村が、勇には上からモノを言う様にしか見えなかった。

それを必死に頭の中で振り払った。

「ああ。ありがとう。お前、よくあの球打ったよなァ」

「え？　あはは！　あんなのまぐれさ！　まぐれ！　たまたま、バットとボールがあたったっつーかさ！」

「そうか……」

勇は帽子を深くかぶった。

「まぐれにしては、良く当たってたじゃねーか」

聞こえないぐらいの声で、勇はそう言った。

そんな中、吉村には勝らないが、ヒット性のあたりを出したヤツが何人かいた。

その中に、秋名もいた。

秋名　陵　右投左打。

レフト前の痛烈なゴロ。

「確か、自己紹介のときにショートを守ってるって言ってたな……まぁ、あの身のこなしとこの打撃ならレギュラーは確実だな」

吉崎（よしざき）　竜次（りゅうじ）　右投右打。

レフト前ライナー。

「こいつは、同じ東京だったから知っている。捕手としての能力はもちろん、吉崎の肩は敵にすれば脅威だが、仲間となると頼もしい」

岩村（いわむら）　朋也（ともや）　右投左打。

レフトオーバー。

「岩村といえば全国大会の埼玉代表だったセカンドの岩村だな……打率では、全国一位だった」

太田（おおた）　健二（けんじ）　左投左打。

センター前ライナー。

「こいつは、たしかＥＬ学園の誘いを蹴ってまで東京に来たヤツだ……全国大会の決勝で闘ったチームの一塁手で四番だったな……そういや、先発だった白杉（しらすぎ）から一本、途中から出た俺から２本打ったんだったな」

吉村以外の新入部員で、前に打球を飛ばせたのは、この四人だけだった。

次の試験に移る前に、鬼城は吉村の名前を呼んだ。

理由は一つしかない。

中田の“クセ”についてだ。

ホームベースの回りに、中田と海原、それに鬼城に菱沼、そして吉村が集まった。

その後ろに、勇たちは集まった。

「……で、吉村か。中田のクセは一体どこにあるというんだ？」

「それなんスけど……極些細な違いなんスよ。実は中田先輩、変化球の時と直球の時とで、振りかぶる瞬間の動作が違うんスよ」

どよっ、とざわめきが起こる。

それは冷静な中田もだった。

「なぁ、新入生。教えてくれないか。その俺のクセを」

吉村は、ニッと笑う。

「新入生じゃないッス！　吉村　大成ッスよ！　中田先輩！」

今度は、中田がニッと笑う。

「吉村。教えてくれ」

吉村が瑛香のエースに自分を認めさせた瞬間だった。

「中田先輩、振りかぶるとき、腕を大きく上に上げますよね？」

それに、中田はウンと頷く。

「そのときッスね。クセが出るのは」

中田の目がより一層真剣になる。

鬼城や海原も同じだ。

「まず、直球の時。この時は、“右足を後ろに下げるのと一緒に腕が上に上がる”んス。でも、これが変化球になると、違う。“右足を後ろに下げてから腕を上げる”。でも、その差はコンマ何秒。でもそんなことわかっても、中田先輩の切れのある変化球は並みの打者じゃ打てないッスよね～」

新入部員たちは、そんな違いあったのか？と、疑う。

しかし中田と海原は納得したようだった。

「俺でも気付かなかった中田のクセを、コイツはたった2球で……さらに、中田の七色の変化球を全てバットに当てた……なんて目と、センスを持ってやがる、この一年坊……」

鬼城は、心の中でそう思った。

その後、中田と海原は鬼城に一礼し、グラウンドを去った。
おそらくこの後は屋内練習場のブルペンでクセを直すために投げ込み等々をするのだろう。
中田たちが去っていく中、鬼城は新入部員に言った。
「……今の吉村のように、俺の好感度を上げるのも一つの策だ。だが、いくら打撃がよくても、今のように好感度を上げても、守備が駄目――あるいは、ベースランニングが下手じゃ瑛香野球部に入れるわけにはいかない。この入部テストでは、「走・攻・守」の三拍子＋αを備えた選手しか取らない。そこを再認識しろ。そしたら、次の試験だ」
鬼城はサードベースに目を向けた。
「お前ら今から半分に別れろ」
え。
と、何人かが口を開けたが、みんなすぐに行動に移した。
「よし。では、これから「走・攻・守・投」の「走」と「投」のテ

ストを始める」

そう言うと、鬼城は先程の守備のテスト同様に、バットを手にした。

そこで、後ろにいた菱沼が前に出てきて、テストの説明を加える。

「えー、今回のテストは「走・投」のテストというわけですが、説明をさせてもらいます。まず、今別れたどちらかのグループが、ランナー。もう一つのグループがセンターの守備につきます。そして、監督がセンターにフライを上げます。要するに、タッチアップで「走・投」のテストを行うという事だ。走塁に自信があるのなら、自分の走塁技術をこの約25メートルの塁間で魅せろ。送球に自信があるのなら、自分の肩で魅せろ。ということだ」

そう言って、菱沼は下がった。

勇たちは納得したように、ウンと頷いた。

サードベースの周りと、バックスクリーンの前に新入部員が二つに別れると、鬼城は菱沼からボールを受け取り、ノックの準備を終える。

今現在、センターには勇、秋名、他新入部員がグローブをつけて集

まっている。

サードには当然、吉村、太田、岩村、他がヘルメットをつけて集まっている。

キャッチャーには、吉崎が抜擢された。

当然、この瑛香に集まるのだから、みんな肩も良し足も速いのだろう。

センターに集まる者たちは、肩を回したり、腕を伸ばしたり。

サードベースに集まるものたちは、小刻み走をしたり、足を伸ばしたり。

そうしていると、鬼城が声を上げる。

「ではこれからテストを始める！　センターとランナー、一人ずつやれ！　いくぞ！」

そう言った後、間髪入れずにノックを始めた。

センター守備陣はあたふたしていた。

すると、「しょうがねぇな」と勇が前に出た。

「オーライ！」ろ勇が声を張り上げると、その周りの新入部員は、サッと素早く避ける。

すると、ランナーたちの方では「俺が行く！」と吉村がサードベー

スに着く。

勇は、吉村が来るとわかっていた。

また、吉村も勇が来たら走る準備をしていた。

勇は燃えていた。

先ほどの吉村への敵対心が勇を燃えさせているのだ。

一方、吉村は楽しんでいる。

ワクワクしながらプレーに集中しているのだ。

勇が一旦後ろに下がり、前に前進し助走をつけながら打球の捕球体勢に入る。

それに合わせて、吉村は体勢を低くし、スタートの姿勢をとる。

勇のグローブにボールが収まる。と、同時に吉村の足が地（ベース）をける。

コンマ何秒で、勇の右手からボールが放たれる。

角度４５で捕手に向かってボールが伸びる。

吉村もグングンホームに向かって走る。いや、伸びるといった方がその足の速さがわかるだろうか。

『速い！！』誰もがそう思った。

際どいタイミングだった。

アウトかセーフか。ホーム手前になってもわからなかった。

しかし、吉村のスライディングが上手かった。

キャッチャーの吉崎のブロックを上手く利用して、タッチをかわしながらベースに触れた。

完全にセーフだった。

本当に吉村という男は、何をやらせても一流だった。

「しゃあぁぁぁぁぁぁ！！」

今度は、打撃の時とは打って変わって、飛び上がり、拳を天に突き上げ、体全部を使って喜んだ。

勇は、その場で呆然としていた。

「（最高の……いや、出来すぎの送球だった……もうあんな正確で速い送球は出来ない……それを、吉村（アイツ）は……）」

勇は天を仰ぎ一度深呼吸し、落ちた帽子を拾って、ダッシュでサードベースに向かった。

帽子は勇みの右手によってグシャグシャになっていた。

吉村も、ヘルメットを脱いでグローブを持ち、ニコニコしながらセ

ンターへと向かっていった。

それを横目に、勇は唇を噛み締めた。

「これが……才能(センス)の差か……」

ならば自信はないが、足で魅せようと思った勇だった。

しかしこの後、勇は絶望の淵へと追いやられることになる……。

第五球　入部試験～後章～

その後、秋名は寸分違わぬ正確な送球でランナーを刺し、太田は体に似合わない走塁でセーフに。

そして、今。

ランナー岩村に対するは先ほど好走塁をした吉村。

気分が乗っている吉村はどこまでも力を発揮しそうだった。

岩村は「走・攻・守」三拍子揃っているプレーヤー。

中でも、走塁技術に関しては職人芸だ。

この二人の対決に、勇は釘付けになってしまう。

特に吉村に目が行ってしまう。

意識しないようにしているのに、だ。

意識しないようにしても、心の隅では気になってしょうがないのだろう。

そして鬼城の吉村を見る目が変わっているのは当然。

この「投」のテストで良いところを魅せれば、確実に吉村は合格だろう。

対する岩村も合格を目の前にしているだろう。

しかし、勇は……。

「守備でまぁまぁ……バッティングで駄目……投のテストでは、負けちまった……」

勇は、ため息一つついて、拳を握った。

カァン！！

乾いた音が響いた。

俯き下唇を噛み締め、考え事をしていた勇はハッと顔を上げ、打球の行方を探した。

吉村は、定位置より少し下がったところで打球が落ちてくるのを待ち構えていた。

岩村は既に体勢を低くし、すぐにスタートを切れる状態でいる。

まるで一騎打ちのように、二人はこの一瞬の勝負のために全神経を研ぎ澄ましている。

そして、高々と上がった打球は、前進してくる吉村のグラブに収まった。

岩村はもうベースを離れていた。

瞬発力と判断力と勘の良さが走塁技術云々の前に必要とされるものだ。が、岩村はそれがズバ抜けている。

岩村の走塁が好評を受ける理由は、そこにある。

吉村の指先から白球が放たれる。

気持ちの乗った吉村の返球と、岩村のパーフェクトな走塁。

この勝負、どちらに軍配があがるのか――――。

吉村の放った白球は、地面とほぼ平行に伸びる。

その球は決して落ちることなく、弓から放たれた矢の如く伸びを増すかのようだった。

それはまさに、マリナーズのイチロー選手などの、投げる力が強い者が唯一投げられる球、通称『レーザービーム』だった。

無論、新入部員一同からは『うおっ！』とどよめきに似た声が上がる。

この短時間で吉村は、何度この場にいるものの度肝を抜いたのだろうか。

いくら足の速い走者でも、この球ではアウトは逃れられなかっただろう。

しかし、走者は走の天才・岩村だ。

タイミングは際どい。

吉村の球は、ベースの少し前に構えた吉崎のミットに収まった。

その時、既に岩村は華麗なフックスライディングで帰還しようとしていた。

しかし、吉崎の無駄のない動きから素早いタッチが繰り出される。

そして、岩村がベースに触れる直前、

吉崎のミットが、

岩村の左肩に、

触れ――……

吉崎のミットが触れようとしたその瞬間。

吉崎のミットが岩村の体をすり抜けた。

――すり抜けたかに見えたのは、岩村がタッチされる寸前に体を後ろに倒したからだった。

見事にタッチを交わした岩村は、そのままキレイに流れるようにしてホームイン。

「セ、セーフ！！」

菱沼の声が響いた。

新入部員からは歓声が上がった。

歓声といっても、小さなもので、「おぉ！」とか「うぉお！！」とか各々声を上げるだけだったのだが。

なんにせよ、軍配は岩村に上がったのだ。

吉村は負けたのだった。

岩村は至って冷静で、ヘルメットを脱ぎ取ると、グラブと守備用手袋を左手に付け、すぐに外野へと向かった。

勇は、どうしても感情が出せなかった。

吉村が負けた。

いや、あの送球でセーフになるのは岩村だけだ。

――俺は嬉しいのか？

それとも、同情してるのか？

勇は、ふと吉村のほうを見る。

すると、吉村はさっきと変わらぬまま、外野の人工芝の上に突っ立ってた。

「……よほどショックが大きかったんだな……」

勇がそう思い、目を離した瞬間。

「クソォォォッ……！！」

消え入りそうな声が聞こえた。

吉村だった。

勇は、その声がするほうを見なくてもわかった。

吉村が嘆き、地に堕ちている。

そんな姿が、思い浮かぶ。

実際、吉村はそれと似た形で崩れ落ちていた。

片膝を着き、地面に拳を叩きつけていた。

すぐに立ち上がりベンチに引き返したが、その間も俯き加減だった。

普段は常に明るく元気に、感情を出さない吉村。

しかし野球だと感情を思い切り表に出す。

その子どものような性格だから、吉村はどんな場面でも最高のプレーが出来るのかもしれない。

勇は、静かにサードベースについた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0641h/

全員野球

2010年10月10日03時21分発行